

津山市史だより

2023.10
第21号



ようあん じよくがくけいげん
宇田川榕菴『植学啓原』

目次

- ・部会通信ほか 2
- ・美作学講座要旨 3~4
- ・刊行予定・美作学講座案内 5
- ・桑山南四号墳出土の皮袋形瓶について 三輪望 6~8

テレビドラマで話題となった植物学者・牧野富太郎。高知県出身、上京し活躍した人物で、津山とは接点がないように思われます。しかし、牧野の自叙伝や随筆集には津山ゆかりの学者達が次々と登場するのです。

まず、牧野は津山藩の医師・宇田川榕菴（一七九八〜一八四六）を高く評価していました。榕菴が記した『植学啓原』を自身で書き写し、「書架の間に備ふべきであると思ふ」と述べるほどでした。

また、牧野は、箕作阮甫の孫で兄弟の菊池大麓（一八五五〜一九一七）と箕作佳吉（一八五七〜一九〇九）に感謝の辞を捧げています。彼らはいずれも東京帝国大学の理科大学長（いまの東京大学理学部長）を務め、牧野が研究室内で厳しい立場となったとき、牧野に同情し、援助したのでした。

最後にもう一人、津山市上之町出身の学者「川村三兄弟」の長兄にあたる菌類学者・川村清一（一八八一〜一九四六）です。牧野は川村が東京帝国大学在学中から親しくしており、川村の死に際して、日本でも数少ない菌学者を失ったのはまことに遺憾とその死を惜しんでいます。（乾）

令和4年度第2回編さん委員会

令和5年3月23日於津山市役所

まず、令和4年度の編さん事業の取組状況などについて事務局より説明しました。これに対して、正誤表や市史研究・市史だよりの編集方針、中世資料編の書評などについて質問がありました。協議事項として、通史編『自然風土・原始・古代』の印刷部数については、千冊印刷し、在庫が少なくなった段階で千冊増刷することになりました。また、今後のスケジュールの組み直し、通史編の監修についても協議し、承認されました。

令和5年度第1回編さん委員会

令和5年8月29日於津山市役所

まず、令和5年度の事業予定や進捗状況などについて事務局より報告しました。その後、刊行スケジュールの調整、市史研究・市史だよりの編集、編さん委員会議事録の公開などについて協議しました。委員会の議事録は、委員の方々にも確認していただいたのち、準備が整い次第市ホームページにて公開することになりました。

部会通信

◆自然風土・考古部会

(部会長：白石委員、副部会長：行田氏)

通史編「自然風土・原始・古代」の版下が昨年度末完成し、現在印刷製本の準備中です。

◆古代部会

(副部会長：今津委員)

自然風土・考古部会と同様に、通史編「自然風土・原始・古代」の印刷製本の準備中です。

◆中世部会

(部会長：久野委員、副部会長：前原委員)

執筆者の追加に向けて人選等、調整中です。

◆近世部会

(部会長：定兼委員、副部会長：在間委員)

資料編および通史編の章立て案の見直し・再検討作業中です。

◆近現代部会

(部会長：在間委員、副部会長：首藤委員)

8月20日、10月1日に部会を開催しました。刊行スケジュールの確認、資料編編集方針、掲載候補資料についてなどを協議しました。令和6年度に資料編の版下を作成する予定となっているため、活字化を進めています。

◆民俗部会

(部会長：前原委員、副部会長：安倉氏)

6月24日に部会を開催しました。刊行スケ

ジュールの確認や、新たに執筆者として加わっていた松井今日子さんの担当分野などについて協議しました。加茂の花まつりや、石山寺のきゅうり封じなどの調査も行っています。

○民俗部会に4月から新たに左の方が加わりましたのでご紹介いたします。

松井今日子(岡山県立博物館) 民俗担当

編さん事業の経過

(令和5年4月)

令和5年

6月24日

民俗部会

8月20日

近現代部会

8月29日

第1回編さん委員会

10月1日

近現代部会

10月31日

「市史だよりの」第21号発行



事業の開始当初から津山市史編さん委員会をお引き受けくださり、委員長としてご指導いただきました。自然風土・考古編担当の河本清氏が4月26日にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

美作学講座

第1回 11月19日

「津山城の修繕―江戸時代後期、勘定方の記録を中心に―」

講師：津山弥生の里文化財センター資料整理担当 乾 貴子氏



となります。さらに六代家宣の「武家諸法度」では櫓・塀・門の制限がなくなります。八代吉宗に至って綱吉期の条文に戻りますが、いずれにせよ建物の修理に強い規制はなかったとのこと。法令

令和4年度第1回の美作学講座は、「津山城の修繕―江戸時代後期、勘定方の記録を中心に―」と題し、津山弥生の里文化財センター資料整理担当の乾貴子氏が講演しました。はじめに、津山城築城の経過などを説明しました。次に、幕藩体制下で津山城の修理・増改築が可能であったのかを考えるため、城郭の建築規制に関する幕府の法令を検討しました。二代將軍秀忠の「武家諸法度」では、修理に届け出が必要でしたが、三代家光以降では櫓・塀・門などは元通りの修理ならば届け出不要

いたようです。法令・組織体系を踏まえて、津山城の修繕歴が語られました。資料の残存状況などから、一七〇二年から一八一〇年、一八一一年から一八三一年、そして幕末という三つの期間に分けて説明されました。一八一〇年までの約百年で六〇件、一八一一年から一八三一年の間で一六件の修繕記録がありました。土居・石垣の補修は十八世紀に記録が集中しているようです。初期は幕府に申請した記録のみでしたが、明和六年（一七六九）以降では修理した規模・場所・費用などが作事方の資料からうかがえます。本丸御殿の再建は、文化年間（一八〇四―一八一八）に描かれた絵図や文字資料から、御殿の焼失から幕府への報告、再建に至る経過について詳細な説明がありました。御殿の再建が終わる一八一一年以降になると大きな修理はあまりみられません。修繕の記録は毎年ありましたが、その他、天明八年（一七八八）の巡見使に備えて大規模な修繕がなされたこと、政治的思惑や役職の変化によっても建物が改築されること、参勤交代緩和による藩主の帰国に伴って増築が行われたことなど、興味深い事例がいくつか紹介されました。

津山市民にとって馴染みの深い津山城が近世を通じて修理・増改築の連続であったとする内容に、来場者の方々も興味深く聴講していただきました。質疑応答では、津山城の櫓の数・建設費用を問う質問などがありました。

美作学講座

第2回 令和5年2月25日

「津山藩主松平家の甲冑と刀剣」

講師：東京国立博物館 学芸研究部列品管理課

登録室・貸与特別観覧室 室長 佐藤 寛介 氏

今年度第2回の美作学講座は、「津山藩主松平家の甲冑と刀剣」と題し、東京国立博物館の佐藤寛介氏にご講演いただきました。



いて説明されました。小札と威によって日本の甲冑は豊かな色彩と優れた防御性を有し、これが日本と西洋の甲冑の大きな違いでした。次に、兜以下の頭から足先までの部位、甲冑を入れていた鎧櫃びつ、櫃内の文書に関する説明がありました。「朱漆塗赤熊植毛兜」と呼ばれる兜は、ヤクという赤毛の動物の毛が用いられました（赤唐の頭と言われる）。胴は鉄の小札を多く用いて防御力が高められたとのことです。

はじめに、佐藤氏は自身がお勤めの東京国立博物館の甲冑に関する動画を紹介されました。本題に入り、津山ゆかりの刀剣である国宝の童子切安綱・石田正宗・稲葉郷いなばごうについて、作成年代・作者・来歴などの説明がありました。これらは「三口の御宝剣」と称され、特に重視されました。国宝や重要文化財となる刀剣は、刀としての美しさと由来の両方を兼ね備えていると述べられました。

甲冑そのものの詳細が語られた後、甲冑の歴史的意義が関連資料から探られました。まず、『徳川諸家系譜』から、関ヶ原合戦直前に徳川家康が西へ向かう際、奥州の抑えの大将に命じた結城秀康に「赤唐ノ頭」の兜と「朱小札啄木糸ノ威」の鎧が下賜されたことを確認しました。次いで、元禄十一（一六九八）年の津山松平藩成立期の資料などにも、家康から拝領したという同様の特徴の具足に関する記述があるとなりました。以上から、津山松平藩は本甲冑を関ヶ原合戦時に家康から秀康が拝領したと認識していました。しかし、佐藤氏は甲冑の細かい特徴から、年代に矛盾があると指摘します。甲冑の製作年代が一六一〇年から二〇年と推定されるため、伝来との間に約二十年の差が存在するということです。そこから本甲冑は、松平忠直が関ヶ原合戦で拝領した甲冑を模して作らせた可能性が高いと結論付けています。

財、個人蔵、朱漆塗本小札啄木糸威胴丸具足しめうるしぬりほんこざねたくほくいとおむしとうまるぐそくについて自身が行った調査・研究の成果も踏まえて解説されました。日本の甲冑の種類を概説した後、甲冑の呼称に含まれる小札や威などの語句につ

ある甲冑（岡山県指定重要文化財）について自身が行った調査・研究の成果も踏まえて解説されました。日本の甲冑の種類を概説した後、甲冑の呼称に含まれる小札や威などの語句につ

新修津山市史 通史編『自然風土・原始・古代』まもなく刊行

今年度、新修津山市史通史編『自然風土・原始・古代』を刊行予定です。平成25年に編さん事業を開始して以来、別巻『つやまの民話』、資料編『考古』、資料編『古代・中世』と刊行しており、今回は初の通史編となります。

通史編『自然風土・原始・古代』は、総勢16名が執筆にあたり、最新の研究をできるかぎりわかりやすく叙述しています。「自然風土」の部では、地質や地理からみた津山盆地の成り立ちについて解説。「原始・古代」の部では、遺跡・遺物や文献などから、人々がどのように生活していたのか、その暮らしぶりをできるだけ具体的に紹介しています。

津山に生きた人々が、自然から恩恵をうけ、ときに厳しい災害や疫病にさらされながらも生き抜いてきたその歴史は、現代を生きる私達に何かしらヒントを与えてくれるものと思います。

販売時期などの詳細は決定次第広報し、次号でもご案内いたします。ご期待ください。

美作学講座のご案内



今年度も美作大学との共催で「美作学講座」を開催します。以下の日時・演題を予定しています。なお、今年度も事前申込が必要です。

第1回 令和5年10月28日(土) 13:30～15:00

講師：尾島治氏（津山市史編さん委員）

演題：「旧津山藩士族たちの明治維新

－家禄奉還者未済金額請願及び復禄請願の経緯－」

第2回 令和5年11月25日(土) 13:30～15:00

講師：山崎真由美氏（ヘリテージマネージャー／建築士）

演題：「市民と士族が残した鶴山館」

第3回 令和6年2月頃（予定）

講師：未定（通史編「自然風土・原始・古代」執筆者の中で調整中）

●会場：美作大学

●定員：100名程度（応募者多数の場合は抽選）

●申込方法：電話、ファクス、メールまたは電子申請

（必要事項：住所、氏名、電話番号、受講を希望する回）

●申込み・問合せ先：津山市地域振興部生涯学習課

TEL：(0868)32-2118 FAX：(0868)32-2039

Mail：gakushuu@city.tsuyama.lg.jp



くわやまみなみ 桑山南四号墳出土の皮袋形瓶について かわぶくろがたへい

三輪 望
はるか

皿川流域には、佐良山古墳群と呼ばれる群集墳が多く見られることで著名な地域がある。古墳群はいくつかの支群に分かれており、古墳が約200基あるとされている。その支群の一つ、桑山南古墳群の四号墳から全国的にも珍しい形の皮袋形瓶が出土した。

桑山南古墳群の発掘調査

桑山南古墳群は国道五十三号改良工事に伴い、岡山県教育委員会が一、三号墳及び五号墳の発掘調査を行った。四号墳は民間開発に伴い、津山市文化課が発掘調査を行った。

四号墳は直径約10mの円墳であり、埋葬主体部は墳丘のほぼ中央に据えられた竪穴式石室一基である。石室内から須恵器、馬具、武器、玉類が出土した。須恵器は石室の西壁、南側中央、北側から出土しており、中でも北側はやや乱雑ではあるが複数の須恵器が折り重なって出土した。皮袋形瓶はこの北側の最下部から出土している。

皮袋形瓶とは

須恵器の中には動物の形を模したもののや、複数個体が結合したものなど、一般的ではない形の特異須恵器という。皮袋形瓶は

特殊須恵器に分類される須恵器であり、革製の容器を模倣して作られたと考えられている。三角形を呈する体部に壺の口頸部が付属するもので、基本的に正面に突帯や竹管文、刺突文が施文される。突帯は革が重ねられた部分であり、竹管文や刺突文が根元に施されることで縫い合わせている状況を表現していると考えられている。特殊須恵器の中では出土例が最も多く、北九州を中心に、秋田県から鹿児島県まで少なくとも100件の出土例がある。六世紀から七世紀にかけて製作された。皮袋形瓶の起源は、北方騎馬民族由来説と日本列島起源説がある。前者は皮袋形瓶が提瓶の古い形状と認識されていたときに、大陸由来と想定され、後者は朝鮮半島からの出土例がないこと、制作技法の観点や同じ液体を運ぶ機能を持つ提瓶の起源が日本列島内であることを根拠としている。

皮袋形瓶について簡単に説明したが、抽象的な文章だけでは理解しにくいと思われるため、次に皮袋形瓶としては一般的な形状をとると考えられる県内の美咲町松ヶ崎(峪)古墳出土例と赤磐市岩田六号墳出土例を紹介する。

岡山県内の出土皮袋形瓶

県内からは管見の限り六点確認されている。このうち松ヶ崎(峪)古墳と岩田六号墳出土遺物は報告書等に記載されており、なおかつほぼ完形である。

・松ヶ崎(峪)古墳出土例 口径6・7センチ、器高13・5センチでほぼ完形品である。前面の下、左右の稜線と中央に一本突帯を貼り付け、突帯根元にはへらによる刺突で縫い目を表現している。肩部に把手を貼り付けるが欠損している。

・赤磐市岩田六号墳 器高約12センチ、底辺



画像1 岩田六号墳出土皮袋形瓶



写真1 桑山南四号墳出土皮袋形瓶

長約16センチで完形品である(画像)。正面の下、左右の稜線と中央に三本突帯を貼り付け、突帯根元に竹管文を施している。以上二点の出土例について簡単に紹介した。どちらもやや小型ではあるが、皮袋形瓶の器高は15センチ前後であることが多く、体部も正三角形か、底辺が長い二等辺三角形であり、突帯を貼り付けのち施文することが多い。施文には個体差が大きい、体部頂部ないし体部中央にすべての突帯の起点がくるように貼り付ける傾向がある。

桑山南四号墳出土の皮袋形瓶

一部欠損箇所があるものの、ほぼ完形で出



写真2 皮袋形瓶内面 肩部

土した。口径13.5センチ、器高約33.2センチであり、個体としては大きい。縦長の円錐台形の体部に突帯を貼り付け、体部中央と左右肩部に把手を伴っている。左側の肩部は欠損している。

この個体は正面を上にも横置きされていたが、上に複数の壺がのつていたことや土圧により、体部中央が破損していたことから内面の確認ができた。口縁内部には強いヨコナデが施されていたが、体部内面には肩部に複数の指オサエが施されていた(写真2)。接合痕は確認できず、屈曲が緩やかであることから、肩部は主に指オサエにより体部上端を押し曲げて形成されたことが判明した。

製作方法としては、筒状の口縁部ないしは同じく筒状の体部を制作し、体部を接合する際に肩部を作り、最後に体部の下端部を直線にとじ合わせたものと考えられる。

その後、外面に丁寧なカキ目を施し、突帯や把手を貼り付ける。施文も同じ古墳から出土した須恵器と比べて丁寧であり、口縁部には二条の沈線を巡らせ、7×9本からなる二段の波状文を施している。体部には前面及び肩部突帯直下にC字形スタンプを施す。

このように、桑山南四号墳出土例は通常の個体よりも縦長で大きな個体とわかる。口縁部や把手が丁寧に作られていることから一般的な形状よりも古い可能性が考えられ、突帯が複数あるにも関わらず、把手の根元に施文をしないなど特異な形状であったため、日本全国の出土例に似た例がないか集めた。この結果、兵庫県から非常に多く似た皮袋形瓶が出土していることがわかったため、併せて紹介する。

伝・兵庫県姫路市(旧香寺町)出土皮袋形瓶

旧香寺町塩田地区で発見されたと伝わる皮袋形瓶である。少なくとも正面下半分は残存しているもようであり、正面からの実測図と拓本で報告されている。桑山南四号墳と同じく、突帯は正面の下、左右の稜線と、中央に三本貼り付ける。突帯と突帯の間にはC字形スタンプをある程度等間隔に施文している。

両者を比較すると非常によく似ており、生産地、もしくは工人が同じではないかと考えられる。皮袋形瓶は個体差が非常に大きく、多数の出土例の中で似た個体が確認された事例は少ない。加えて共伴土器の中に搬入土器と判断できる土器が含まれることから、これらの類例についても調査し、関連性について追及していきたい。

参考文献

愛知県陶磁資料館1995『古代の造形美裝飾 須恵器展』

入江文敏2015「特殊須恵器の分布とその背景」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』上 邦彦先生古稀記念会編

牛嶋英俊2010「革袋形土器研究小史」『同志社大学考古学研究会50周年記念論集』50 周年記念論集編集委員会

岡山県山陽町教育委員会1976『岩田古墳群』香寺町教育委員会1986『法華堂2号墳』

柴垣勇夫2003「裝飾付須恵器と特殊須恵器」『考古資料大観』3

中野雅美2020「松ヶ崎(峪)古墳」『中央町誌』資料編 美咲町市史編さん委員会中央町誌編集委員会

三輪望2022「桑山南四号墳」『津山市内遺跡調査報告書平成30年度～令和2年度』津山市

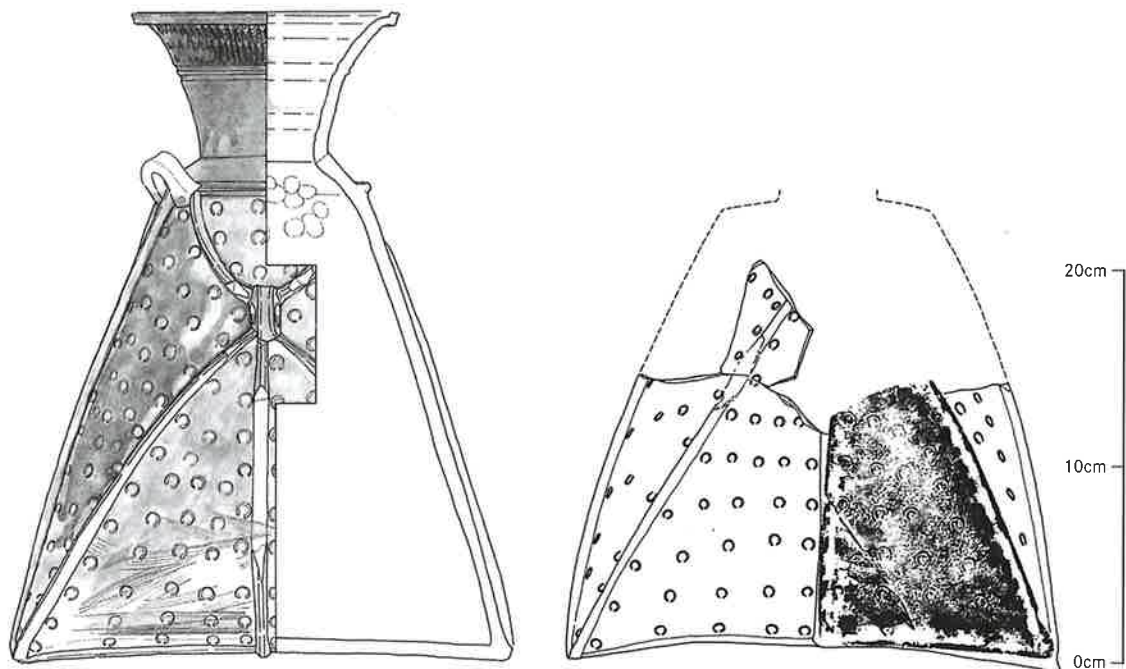


図1 桑山南四号墳出土(左)と伝・姫路市出土皮袋形瓶 S=1/4

津山市史だより
第21号

発行：令和5年10月31日

編集：津山市史編さん室

〒708-0824 岡山県津山市沼600-1

津山弥生の里文化財センター内

TEL:0868-22-5820 FAX:0868-24-8414

Eメール: shishihensan@city.tsuyama.lg.jp